JOBURG EXPRESS

1月　発行　No.8

ヨハネスブルグ日本人学校　中島緑郎

思い切って現地の人の中に飛び込みました。その２

多くの在外教育施設がそうであるように、ヨハネスブルグ日本人学校でも学校全体の研究テーマが現地理解を進めるためのものになっています。その学習成果を、学習発表会の場で披露するのです。今年の学習発表会は『南アフリカを楽しもう！』というテーマで進めることになっていましたが、そのテーマにどうやってコ d 子もたちを導くかが、私たち教師のテーマということになります。それを検証する『研究授業』が、9 月にありました。今回は学校での教育活動の様子をお伝えします。

さて、研究授業は学習発表会の発表ユニット分けと同じく、①小学１～３年生、②小学４～６年生、③中学部で実施。中学部は『南アフリカと日本では、どちらが優れた国か』をテーマにした国語のディベート授業でした。それぞれの国の優れた点を調べ上げて討論しましたが、事前の調査や資料収集、論の立て方など、どの生徒も見事なものでした。ただ、結果は政治経済や生活環境など、ほぼすべての面で日本が優れていると主張したチームが勝利しました。論理立てて討論すればするほど、数値的な優位は日本側でした。

続いて行われた小学１～３年生の授業は、社会科・生活科の学習という側面から南アフリカと日本のスーパーマーケットを比較する内容でした。１学期、社会科見学で学校近くの Pick`n Pay という大手スーパーに見学に行ってきた時の体験をもとに、南アフリカのスーパーのよいところを見つけ出そうという授業でした。生活経験が乏しいはずの低学年でも、ちゃんと南アフリカのスーパーの特徴をとらえていて驚きました。

小学４～６年生は、というと、今まで JOBURG EXPRESS でもお伝えしてきたように現地校の IR 校との交流での取材活動や南アフリカのサッカー協会、建設途中のスタジアムや鉄道の見学などを通じて様々な側面から南アフリカの様子を調べてきた中から、特に最も身近な題材である『遊び』について日本と南アフリカを比べてみようという内容で研究授業を展開しました。南アの子どもって、どんなことをして遊んでいるんだろう？　そこでは日本人学校で働いてくれている現地スタッフの方をゲストティーチャーとして招き、直接自分が子どもだったころに楽しんだ南アフリカの遊びを教えてもらう活動を行いました。

インターネットなどでも十分調べ学習ができるにもかかわらず、私たち教師が現地スタッフの方を連れてきたのは、やっぱり人間同士の触れ合いがお互いを理解する一番よい方法だと考えたからです。私自身、ドライバーのメカさんが所属するコーラスグループを招いて芸術鑑賞を企画したり、学習発表会でも現地スタッフの方を引っ張りだしてみんなと一緒に歌を歌ってもらおうと企んだりしたように、エレクトリックフェンスや車の内側から見ているだけの南アフリカというくくりではなく、そこに暮らす一人一人の生身の人間にもっと目を向けてほしかったからです。道徳の学習として、ただ南アと日本の違いに気づくだけではなく、現地の方と直接触れ合うことで南アという国を作り上げてきた現地の方に尊敬と親愛の心を持ってほしかったのです。

私は、人間の本質はたとえ国籍や言葉や肌の色が違っても変わらないものだと信じています。というより、変わらない部分こそが大切なのだと思うのです。違うのは多分育った環境によって左右される部分です。今回の授業では、事前に教師が現地スタッフの方々からお話を聞いて取材をするなかから意図的に日本と似通った内容の遊びを活動の題材として選びました。そして遠く離れたこの国でも、昔から日本に伝わる遊びと同じような遊びがあると気づいてもらうように仕向けました。その中から、“なんでこんなに違う国なのに同じような遊びがあるんだろう？”“子どもが楽しいと感じることって、日本も南アフリカも変わらないのかな？”“貧しいはずの南アフリカの遊びもすごく面白いな”などと感じてくれたら…と期待していたのです。

私は現地スタッフの方と接するたびに、いつも“正直な人たちなんだな”と感じます。いい人、という意味ではなく、自分たちの感じることに対して正直な人たち。他との協調を優先して時として自分の感じたことを飲みこんで暮らす日本人とは違う彼らの一面に、いつも学ばせてもらっている毎日なのです。学習発表会はこのような年間を通じた取り組みの中でたどり着いたものでした。

鬼ごっこというか、かんけりというか、的当てというか、なんとも面白いこの遊びは BATHI というらしい。缶を立てる側と倒す側に分かれて遊ぶ。ボールを投げて積んだ缶を倒し、相手が積み上げようとするのをボールで当てて阻止するという遊び。ドライバーのケイファスさん、メカさん、ピーターさん、クリーナーのユニスさん、セキュリティのドゥドゥさんが協力してくれ、大いに盛り上がった。

あやとりは“Cat`s cradle(猫のゆりかご)”という名前で南アでも遊ばれていた。やっぱり女の子の遊びで、キン先生が教えてくれた。一応私の担当だったので、インターネットで勉強しましたよ、あやとり。おかげで４段はしご→東京タワーの大技をマスター。あやとり初体験の〇〇くん、小指と親指に糸をかけるだけで５分経過。このあやとり、アフリカだけではなく実はアラスカやニュージーランドにもある。それも大昔から。不思議！

コマはこちらでは Top という。どんぐりのような形で、男投げと女投げがあるらしい。芯を上に向けて投げるのが男投げで、難しいけれどよりスピンを効かせられるという。そういう区別って確かに日本の昔の遊びにもあったような…。こちらはウォーリーさんが指南役。そういえばこういうおじさん、日本の下町にもいたような…。ゲーム機ばかりが遊びのような現代っ子も、やっぱり楽しいと感じるツボは昔の人と一緒なんだね。

いつも顔を合わせてはいるけれど、『一緒に何かをする』という体験は意外に少なかった現地スタッフの方々と子どもたち。コンビニもないし外歩きも危ない。時間は守らないし停電も断水もしょっちゅう。…だけどいい人たちが多いんだなぁ、この国は！

To Be Continued！